

埼玉県ブランド繭“いろどり” 地産地消のすゝめと きもの文化再発見



NPO法人川越きもの散歩

<私たちの危機感>

①民族衣装である着物を自ら着ることが出来ない日本人が大半という現実。

②日本文化としての「養蚕」は絶滅の危機。
*埼玉県は全国3位の養蚕県だが、
その文化は
消えようとしている。



NPO法人川越きもの散歩とは

<設立>平成21年3月

<会員>30名

<目的>

1)日本の民族衣装、「きもの」を身近な暮らしに戻し、次世代につないでいく。

2)かつて養蚕で栄えた埼玉県の絹文化の発信

<活動内容 >

1)毎月28日川越きもの散歩の開催
成田山別院の骨董市にて集合、
きものでまち歩き、きもの仲間作り

どなたでも自由に参加

1991年より10年以上開催



2)きものでまちづくり

埼玉県にはかつて織物・繭・で栄えた町がたくさんあり、きもの姿も町の景観のひとつ。昔と今をつなぐツールとして織物ゆかりの町での「きもの散歩」を開催しています。

行田・本庄・深谷・埼玉絹の道・・・

横浜へ



3) 埼玉県ブランド繭「いろどり」で顔の見えるきもの作り

国産の絹はもう1パーセントしかなく、絶滅寸前。

全国に養蚕農家621軒 埼玉県58軒 全国3位の養蚕県
平成21年埼玉県NP0基金事業「チャレンジサポート」に採択



養蚕農家見学ツアーの開催

埼玉県観光課・JTBとの共催



3) 埼玉県ブランド繭「いろどり」で顔の見えるきもの作り 繭の地産地消を・・・

毎年さいたまの繭100キロ購入し、生糸20キロから製品作り。



本庄の伝統工芸士に草木染め・手織りを依頼

きもの・帯・ポケットチーフ

3) 埼玉県ブランド繭「いろどり」で顔の見えるきもの作り

人知れず消えていく 日本のお蚕・絹を知ってもらいたい・・・



上田知事にチーフを贈呈

埼玉産の繭を使った製品

男性用ポケットチーフ…3800円

男女・着物反物

138000円～158000円

100%純国産絹



4) 子育てサークルと連携し、母と子のきもの体験イベントの開催

親子で普段着のきものを体験してもらい、あっという間に成長してしまう子供たちの小さい日のきもの姿を記念に残すお手伝いをしています。

企業のイベントなどで開催可能（1回3万円より）



5) 企業にて「きものの着方教室」の開催

日本の民族衣装である「きもの」を自分自身で着る講座。

⇒ 従業員への福利厚生・きもの文化の継承へ



川越市の会計事務所にて開催
1人3千円（参加人数により）



企業のイベントなどに出張可能
きもの体験（3万円より）

6) 富岡・川越・横浜をつなぐ「シルクものがたり」シンポジウム

- 平成26年3月23日 川越氷川会館にて開催
- 開催費用の援助を募集しています。
- 一口5万円より・・・パンフレット・HPに御社名を掲載



平成19年度「埼玉織物サミット勉強会」

平成21年「埼玉の養蚕を知るシンポジウム」

参加者 180名

共に埼玉県NPO基金協働事業に採択されました。

<企業の皆様へのお願い>

活動支援として、年間一口5万円のご協賛

- ・HP、イベントちらし、理事の名刺等にて協賛企業として告知

- ・平成26年開催シンポジウム・パンフレットに企業名を掲載
法政大学教授・江戸文化研究家
田中優子氏の講演「日本人と絹」



会場提供・・・川越氷川会館

＜主な活動実績＞

- ☆平成19年度 埼玉県NPO基金 「織物で紡ぐ埼玉のまちづくり」採択
- ☆平成21年度 埼玉県NPO基金 「埼玉ブランド繭での顔のみえるものづくり」 チャレンジサポート採択
- ☆埼玉県観光課・JTBとの埼玉県の職人工房をめぐるツアー
絹文化再発見ツアーなどを12回企画開催。（平成23年、24年）
- ☆平成22年和光市との協働事業「和光白子宿きもの散歩」開催
- ☆小江戸川越観光協会・川越市観光課との「川越きもの日」実行委員会メンバー
毎月18日は「川越きもの日」
- ☆川越氷川神社、高麗神社、秩父神社と「さいたま絹文化研究会」を設立
絹文化発信の会報を発行
- ☆ 9月14, 15日の サイタマ スマイル ウーマン フェスタに
県より推薦され出展（埼玉版ウーマノミクス）

☆平成24年 埼玉県共助社会づくり支援事業（市町村・NPO等協働モデル推進事業）
障がい者施設・NPO織の音アート福祉協会と協働



織の音
**まゆ
工房**

週末ものへり体験学習
「繭からの
生糸作り体験」

「繭」の体験「12/16」

わたしたちは障がい者自立支援を目的に活動していますが、同時に地域の活性化にも取り組んでいます。
ご来店、ご観覧のみならず、繭の糸の糸作りを通して、織物体験の出来る交流の場を創りました。
わたしたちの繭糸から、着物や浴衣をつくる。想像はあっても、かぎりません。そんな中、埼玉県には新しい伝統産業が育ちつつあります。繭の伝統技術も一緒に認識しませんか？

10/14(日) 12:00 open

さいたま市北区宮原町3-481-2
宮原駅西口より徒歩3分

埼玉県産いとり繭を守る会
事務局 NPO法人織の音アート福祉協会
さいたま市北区宮原町3-473 049-774-9882
この事業は埼玉県共助社会づくり支援事業として実施しています。

織物で栄えた歴史伝えたい

埼玉の小江戸・川越市を「着物が似合う街」に、と女性たちが奮闘している。風情ある通りを着物姿でそぞろ歩き、北関東の織元と連携して新商品を開発。かつて織物で栄えた川越の歴史を次代へと伝える取り組みだ。

小江戸が守る絹文化

川越着物で街歩き、商品開発も

黒壁の蔵造りをカラフルな着物が彩った。夏の日差しを受けながら歩くのは、NPO法人「川越きもの散歩」のメンバーたち。二〇一〇年の結成以来、着物姿で穴場的な観光スポットを訪ねる会を開いている。しっとりとした景観に溶け込む女性たちの姿は、住民にはおなじみの光景だ。



①蔵造りの街並みを歩く「川越きもの散歩」のメンバー。左から2人目が代表理事の藤井美登利さん
②織物の集積地だった時代の面影を伝える旧川越織物市場



桐生市の織元に依頼して作った桐生風通織

業集積地となる。暮末に英年(百)購入して、反物国製輸入糸を使い低価格でポケットチーフにする。群馬県桐生市に残る、着た模様様の木綿川越唐櫃は、大ヒットした。消費地と直結する地の利を生かして大量に出荷され、庶民のおしゃれ着として流行する。明治後期になると、近隣の所沢や入間、飯能などに相次いで織機工場ができ、川越の地位低下が言われる。川越織物市場は、地元商人の起死回生をかけたプロジェクトだった。市場は、産地と問屋との直接取引が拡大する流れのなかで、閉鎖された。ただ、失敗に終わったとはいえ、織物産の再興を懸けた挑戦に、藤井さんは重ねる思いもあった。「いま、日本の織物産業は絶滅寸前だ。着物を好きでいる人にも、着物を着てほしい」と話す。小江戸のシンボル、蔵造り次世代につないでいきなさい。二年前から、貴重なたちが建てた。着物は、街なると国産絹を製糸化する事業を始めた。秩父地方で生産される絹(こゝろ)の一部にした」と話す。

街も心も華やか きもの散歩

行田の蔵巡りに着物姿で駆けつけた「きもの散歩」の参加者たち。約20人の着物姿が目を引きいた(17日)



愛好団体、織物産地へ

織物産地を訪問しているのは、毎月28日に川越市内を着物で散策している「川越きもの散歩」(藤井美登利代表)の参加者たち。「着物は目立つから好き」という20歳代女性から、「定年を機にスーツを捨て、どこへ行くにも着物」という60

の養蚕業は1939年の収繭量2万3600トをピークに年々衰退。2007年度はわずか38トだが、群馬、福島、栃木に次いで全国4位。藤井代表は「あまり知られていないが、埼玉は今も国内有数の養蚕県で、織物関連産業や伝統工芸が息づ

いているんですよ」と話す。今月4日には、絹の産地として栄えた越生町の歴史を伝える洋風建築「越生織物会館」(1930年築)が解体されると知って十数人が急ぎよ訪問し、消えていく産業遺産の最後を着物姿で惜しんだ。

川越市を拠点に活動する着物愛好者グループが、銘仙の秩父市、足袋の行田市など県内の織物産地を着物姿で訪問し、街おこしに役買っている。織物産地が築いた古い街並みを着物姿で彩ることで、地域に残る文化遺産の魅力を高め、失われつつある織物産地を守っていききたいとの願いが込められている。

歳代男性まで幅広い。4年前の発足当初は川越市内だけの活動だったが、着物への興味が高じ、2年ほど前から秩父や行田など織物産地の市民団体と交流するようになった。

17日に行田市街で行われた「蔵めぐりスタンプラリー」には約20人が参加。全国シェア8割を生産する日本一の足袋の街として栄えたこの面影を残す足袋工場跡や足袋蔵を着物姿で巡り、行く先々で人々の視線を集めた。

主催者のNPO法人・ぎょうだ足袋蔵

ネットワークの朽木宏代表理事は「足袋といえは着物。街を歩いてもらうだけで雰囲気が変わります」と歓迎。足袋職人の島崎忠樹さん(73)は「足袋の需要がなくなっていく中、着物姿の人がこんなにくさん来てくれると、張り合いがある」と笑顔を見せていた。

秋には秩父の養蚕農家との交流ツアーが計画されており、県産繭を使った着物の開発に協力する構想もある。藤井代表は「今後とも織元との交流や各地の着物散歩を通じて、埼玉の織物の新たな魅力を発信していきたい」と話している。「きもの散歩」の詳細はホームページ(<http://www.koeidomonogatari.com/>)を



絹製品を生活に生かす

県産繭の地産地消を

西方見聞録

着物を身近な生活に生かして次世代につなげる活動に取り組んでいるNPO法人「川越きもの散歩」藤井美登利代表が、絹製品の地産地消に本腰を入れている。国内の絹製品の原料となる繭の国産比率はわずか1%と、国内の蚕糸業界の存続が危ぶまれる中、養蚕農家をほしめ製糸会社、絹加工会社などとともに繭の生産から絹織物などの製品化・販売までをシステム化した提携グループを立ち上げ、養蚕農家の年間生産量の購入を補償する活動に取り組んでいる。藤井代表は「生産者の顔の見える着物」のつくり、繭の地産地消に寄与したい」と張り切っている。

「きもの散歩」が加盟している、業の承認を受け、今年8月に提携グループは埼玉製糸協会設立した。同会には、山形県の製糸会社や滋賀県の布団製造社、秩父市の織物組合、坂戸市の化粧品製造販売会社などが加盟。秩父産のブランド繭「いごの場合」、繭を集荷会社を通して、化粧品会社や布団会社に出荷するほか製糸会社経由で、織物組合などが入荷し、加工販売する。

この中で、「きもの散歩」は「いごの場」を製糸会社経由で年間1000疋を購入。このうち、60疋を着物や帯などに製品化するのほかに、40疋を「いごの場」に販売する。

NPO法人「川越きもの散歩」



埼玉県産ブランド繭「いろいろ」で加工した絹糸と反物を披露するNPO法人「川越きもの散歩」の会員たち(中央は藤井美登利代表)

市内の知的障害者自立支援団体「提携」、同団体が絹のシルクマフラー、バッグなどの織物を製造、販売する予定。同散歩が「シルクの会」に加盟したのは、2009年に秩父市の知的障害者自立支援団体の織物組合 銘仙館や養蚕農家を見学したのがきっかけ。絹糸を購入し県内の織物作家などに反物やスカートの製造を発注。完成品を購入、販売している。

「きもの散歩」は24日、県JTBとの共同事業で、秩父養蚕農家の見学ツアーを企画。10月28日は川越市新富町の感で、県内の織物作家5人が「いろいろ」を材料に制作した着や帯(絹織物作品)の展示会「ワークショップ」を開く予定。問い合わせは藤井代表(048-993360・5113)へ。

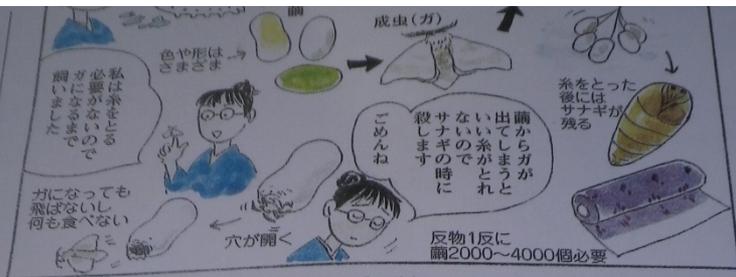
「川越きもの散歩」川越の40・50代の女性を中心に男女約30人の着物愛好家グループ。毎月1回、着物で街を歩「きもの散歩」を実施しているほか、県内の養蚕農家を支援するため、繭を購入し、県内の織に草木染や手織りのオリジナル着物を発注し、販売している。

ら支える活動を知った小林倉から同会への加盟を打診されたい。

藤井代表は「桑畑があるから山田があるように養蚕が環境を育んでいる」とが、秩父にくと分かるんです。着物愛好家にとって、経原則だけで繭の養蚕文化がなくなってしまうのは、あまりに惜しい。「いろいろ」を購入するとは桑畑を残すことだ」と話している。

共同通信

全国12地方紙に配信



エッセー漫画「あなたも飼ってみては？ 意外にかわいい蚕の話」
(近藤ようこ作)



ブランド繭「いろどり」で作った着物を着た藤井さん(手前右)と「川越きもの散歩」のメンバー。並べた反物もすべて藤井さんたちが頼んで織ってもらった＝埼玉県川越市

「顔の見える」着物

動く消費者

「これはモンケラスで染めてください。この人は、写真のような緑にした繭です」
染織工房の主人にそう頼んでいるのは、埼玉真川越市の藤井美登利さん。着物を来てくれたのは、60年やっとなるけど、着物で来てくれたのはあなたたちが初めて」と言われた。「私たちはつくり手と分断されている」と痛感した。

作り手と絆育む

事業を通じての社会メリット

- きもの文化を次世代に継承
- 埼玉の風土への理解と愛着が増す
- 埼玉の養蚕絹文化の発信と継承
- 女性の社会活動を促す



～ご清聴ありがとうございました～



NPO法人川越きもの散歩